2007・11・28

（第3種郵便物認可）　高知新聞

# ガーナでエイズ対策隊員

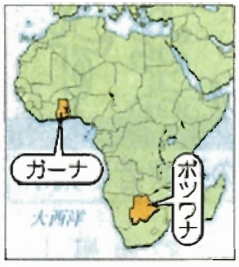
## 高知女子大OG・南口さん（兵庫出身）

高知女子大学の卒業生で青年海外協力隊員の南口（なんこう）美佳さん（二七）＝兵庫県西宮市出身＝が、アフリカのガーナでエイズ対策隊員として活動している。ガーナは今後、若年層でHIV（エイズウイルス）の爆発的感染拡大が予想される地域。一時帰国していた南口さんは「正しい予防策と知識を子どもたちに伝え、感染者が人間としての尊厳を取り戻せる活動をしたい」と話していた。

（竹村朋子）

南口さんは平成十五年に同大社会福祉学部を卒業後、イギリスに留学して医療や福祉を勉強。このとき、知的障害者施設の寮母を務める南アフリカ共和国出身の夫婦と出会い、彼らの紹介でアフリカへ。ボツワナの「HIV・AIDS孤児デイケアセンター」で約三カ月間、ボランティアとしてパソコンや水泳などを教えた。

ボツワナは四人に一人がHIV感染者またはエイズ患者で、週末ごとに葬儀が営まれていた。「私に何かできることはないだろうか」と自問していた南口さんは帰国後、「アフリカのエイズ対策にもっとかかわりたい」と、青年海外協力隊エイズ対策隊員の試験を受けて合格。十八年秋にガーナ・クマシのNGOに赴任した。




ガーナの感染者と患者は人口（約二千三百万人）の3％強という統計もあるが、実際にはもっと多いという。

「感染経路の98％は異性間の性交渉ですが、根底には貧困が存在しています。食べていくため、高校の教育費を援助してもらうため、という理由で少女が性交渉を持つこともあります」

一方、NGOなどが避妊具の使用を呼び掛けても、宗教上の理由から拒まれることがある。女性は男性に比べて社会的地位が低く、発言力も弱いため、男性に避妊具の装着を言い出せない面もあるという。

## 貧困背景に感染拡大
## 偏見で人権侵害も

エイズについての知識と情報の不足のため、感染者が不当な扱いを受けている実情もある。

「感染者と一緒に大皿料理を食べたり寝てはいけないと、食事やベッドを別にする家がある。マラリアのように蚊が媒介すると考える人もいる。会社を解雇される感染者や、親せき中をたらい回しにされるエイズ孤児もいます」

病気を正しく理解してもらおうと、現地では感染者の女性たちがラジオに出演したり、学校の教壇に立つ活動を始めた。南口さんは彼女たちと小中学校をつなげたり、生徒への性教育の中でエイズ検査の重要性などを訴えている。

「一般的に患者はやせ細っているというイメージがありますが、ふっくらとしている感染者を見ると、子どもたちの意識も変わるんです」

任期は残り一年を切った。南口さんは「ガーナは人と人がつながれば強い連帯が生まれる国。感染者や患者が人間の尊厳を確立しながら生きられるよう、人と人を結ぶ活動をしたい」と話している。

南口さんは、障害のあるさまざまな人を支援する活動も行っており、今月上旬には現地で障害者らと「よさこいフェスティバル」に参加し、楽しんだ。障害者支援や国際協力に関心のある人の連絡を待っている。メールアドレスは nansea0128@hotmail.com

## 「人と人結びたい」

「人と人をつなぐ活動をしたい」と話す南口さん（高知新聞社）

▲HIVをテーマにした劇を中高生らと練習する南口さん＝右から2人目（ガーナ・タマレ）

鳴子を手にダンスする、高校生と障害者の合同チーム（ガーナ・アクラ）